

「馬術部のエスノグラフィー」

市川宇宙

キーワード: 北大馬術部、コンタクト・ゾーン、伴侶種、応答責任、生成変化

要旨

本稿は、規律と身体的リスクが常に隣り合わせにある「接触領域(コンタクト・ゾーン)」としての北海道大学馬術部において、学生がいかなるプロセスを経て馬という異種との「共生」を身体化していくのかを明らかにすることを目的とした研究である。現代社会で一般的な「愛玩(ペット)」としての動物観は、圧倒的な質量と他者性を持つ馬との接触現場では通用しない。本研究では、この現場における学生の意識変容を、「応答責任」や「生成変化」などの概念を用いて分析し、従来の動物倫理の二元論を乗り越える、実践的な多種間倫理のあり方を提示する。

第1章では本稿の目的や、それに至った背景を述べる。第2章では、馬の生物学的特性と人間による利用の歴史的変遷について、第3章では近代的動物観の限界と本研究の理論的枠組みとなる先行研究について示す。第4章では、フィールドワーク先である北海道大学馬術部の沿革と現状、および調査概要について述べる。第5章では、現役部員へのアンケートおよびインタビュー調査の結果と分析について記述する。第6章では、調査の結果と分析を総括し、馬術部における人間と馬の関係性の変容、およびそれが持つ倫理的意義について考察する。

第6章の考察および結論として、部員の意識変容は最終的に二つの成熟へ収斂することを提示する。一つは、馬を他者として認め、明確なルールと環境設定によって相互のストレスを最小化しようとする「政治的・技術的成熟」である。もう一つは、人間側が支配を手放し、自らを馬のための媒体(道具)へと変化させることで逆説的に対等性を獲得しようとする「倫理的・存在的成熟」である。これら是对立するものではなく、いずれも入部当初の自己中心的な愛玩観を乗り越え、痛みや危険を抱えたまま他者に応答し続ける「身体技法としての倫理」の獲得を意味する。本研究は、馬術部が人間中心主義的な自己を解体し、動物と共に生きるための新たな主体を生成する「生成変化」の現場であることを結論づけた。